

「書きたくなる」は何によって支えられるか

松本博雄(香川大学)

キーワード: 幼児, リテラシー, 子どもの声

問題と目的

たとえば小学校入学後の音読・書字指導や、それに対する保護者や保育者のイメージに典型的に表れているように、日本における初期リテラシー指導は、正しく文字を読む・書く点に焦点化される傾向がある。これに対し、子どもの「声」(Children's voices; Murray, 2019 et al.)を引き出し、言葉で自分の思いや考えを表現する基盤を形成するための初期リテラシーという観点から、幼児期の「書く(描く)」表現のあり方とそれを支える条件を検討する。具体的には、日常の保育実践の中に埋め込むかたちで「手紙」のやりとりを展開するアクションリサーチ(以下「ぶんつう」)を試みる。

方法

調査対象者

公立H幼稚園/P幼稚園 4-5歳クラス児計118名(H園4歳児30名/5歳児30名/P園4歳児30名/5歳児28名)

手続き

幼稚園教諭免許の取得を目指している大学3-4年生45名が研究協力者として参加した。大学生はそれぞれ、1名あたり対象児2-3人とペアリングされ、自由遊びの時間帯に幼稚園に一定の回数訪問(1回あたり1時間程度/原則3回)し、ペアリングされた対象児を中心に「一緒に遊んで仲良くなる」ことが求められた。遊びへの入り方は、対象児の遊びを特定の方向に引っ張るのではなく、子どもの思いに沿った遊びにしぜんに加わるようなかたちを基本とした。

毎回の訪問時もしくは訪問後すぐに、協力者はペアの対象児に向け、基本的に訪問時の遊びや会話に関わる内容で手紙を書くことが求められた。手紙のねらいは「ペアの子どもが返事を書きたくなること」として教示され、対象児の多様な表現を返信として引き出す内容の工夫が協力者それぞれに委ねられた。対象児は自由遊びの中で、「手紙ごっこ」の一環として返信を書くことができ、そのための環境(ハガキやポスト等を設置した手紙コーナー)が保育室内に準備されたが、返事を書くための特別の時間は設定しなかった。対象児から返信が送られた場合、協力者は原則返信を続けることで、手紙を介して子どもの声を継続的に引

き出すことが期待された。

研究実施ならびに資料の活用にあたっては、対象児の保護者および園の教職員、研究協力者に文書による説明を実施し、了解を得た。

結果と考察

協力者との手紙のやりとりに参加し、自らも手紙を書いた対象児は77名(65.3%)、手紙を書いた回数は一人平均2.17回であった(ペア学生以外に書いた手紙も含む)。また実際には手紙を書かなかったケースの中にも、自らに宛てられた手紙を初めて受け取った経験がとても嬉しく、それまではめったに足を運ばなかった保育室内の手紙コーナーに自ら向かい、ハガキを手にしたたり戻したりを繰り返すといった例が観察された。個々の手紙に関わるエピソードおよび内容の分析から主に示唆されたのは以下3点である。

1. 学生との「ぶんつう」は書くことや言葉に対する多くの対象児の構えを変化させ、ふだんは手紙や文字に関心が薄かった子どもに対しても「伝え合う」ことへの興味を引き出した。

2. 幼稚園での友だちや保育者との日常の遊びを土台に、書き表現へと巻き込まれる対象児が数多く見られた。特に4歳児は「手紙を書いての返事」にすぐ進むのではなく、お手紙ごっこで目の前の友だちや学生と絵等をやりとりする、手紙を配る役割に夢中になる、絵や文字を書くことを学生に頼む、それを見て楽しむ等、多様な姿が観察された。その過程で他者の姿に刺激され、その後自分なりに手紙を書き始めたケースも多かった。

3. 子ども間の共同活動、かつ書き始めの段階において、「おてがみありがとう」「だいすき」「またあそぼうね」等の定型表現が対象児の書き言葉に比較的多く見られた。これらの定型表現は、個々の多様な思いや考えを言葉で表現する力が発達するうえでの基盤となっている可能性がある。

引用文献

Murray, J. 2019. Hearing young children's voices. *International Journal of Early Years Education*, 27:1, 1-5.

付記

科研費基盤C(18K0248)・香川大学教育学部・附属学校園研究プロジェクト(2019)の助成を受けた。